

# 屋久島の歴史

山本秀雄

「上屋久町歴史民俗資料館」は、歴史という文字が頭につくためか、または学校生徒の総合学習という教育制度によるためか、最近、高校生や中学高学年生たちの中に形あるものから郷土をとらえて見ようとする傾向もみて喜ばしい次第。資料館にも生徒同志で、あるいは先生に引率され父兄同伴してのほほえましい姿を見かけるは収穫である。

中でも島外からの入館者に、グループで毎年テーマをもつて来島し、研究の輪を広げている方々のあるは私も

ちに大きな力を与えてくれる。感謝するところである。

さて、今回本誌に掲載させて頂く「屋久島の歴史」だが、先に屋久島高校のある学年の総合学習の時間に質問された項目の一つにお答え出来ず、宿題事項としていたものに歴史問題がある。屋久島のどんなことを知りたいか、生徒さん達にアンケート方式でたずねたところ、約七十点中、一番多かつたのが歴史的なことがらだった。

ここに本誌にお願いして私の答えにさせて頂きます。

六世紀まで、九州は、中部山岳地帯を境と

は至らなかつた。

して漠然と二分され、北部を「筑紫」、南部を「日向」と総称されていた。筑紫はヤマト朝廷の統制に服した文化的先進地だったが、日向はほとんどヤマト朝廷とは無関係であつた。西暦五二七年に起つた筑紫国造磐井の乱を平定した後、ヤマト朝廷の支配の手は、おむね大隅半島・薩摩半島にまで及ぶようになつたが、南方洋上に散在する島々にまで

しかし、ヤマト朝廷が南島に関して無知だつたかというと、そうとも言えまい。推古十六(六〇八)年、遣隨使の小野妹子は隨の朱寛が目立ちはじめる。小野妹子が夷耶久人の布甲を見分けたのも、おそらく漂着者の着衣から得た知識であろう。隨の煬帝の琉球征伐、農民暴動による隨の滅亡など、大陸の政情不安が南島方面に多くの亡命者を流出させたのである」と述べている。推古二十四(六一

六)年には益救人が三十人漂着し、彼等は朝廷に保護されて飛鳥の朴井に住居を与えられ

その後、朝廷もようやく南島に興味を示すようになった。舒明元(六一九年)には朝廷

私有田に関する役人である田部連が益救島に遣わされた。だが、南島は僻遠に過ぎたのか、益救人の一団を大和に呼んで禄を授けたのみで、この後の数十年間、朝廷は南島を忘れたがごとく記録には現れない。

南島の価値が再認識され、日本史の表舞台に登場するのは七世紀から八世紀にかけてである。天智二(六六三)年、日本軍は白村江で唐・新羅の連合軍と戦い惨敗、国家存亡の危機にみまわれた。相手方に日本を征服する意図がなかつたため国交はまもなく回復されたが、これにより日本側の新羅に対する不信感は拭いがたいものになつた。その後は、遣唐使を派遣するのにも、これまでの朝鮮半島沿いに北上して山東に上陸する北路をとらず、筑紫の那の津から東シナ海を直接揚子江の河口を目指す南路に切り替えた。

そのための足掛かりとして南島経営の必要に迫られた朝廷は、天武八(六八〇)年、倭馬飼部連を大使に、上村主光欠を小使として、再び調査団を南島に遣わした。一行は、二年がかりで多櫛島や付近の諸島をくまなく調べて地図を作成、朝廷に奉った。倭馬飼部連を大使にしたということは、(記録には書かれていはないが)相当数の騎馬軍団が同行したことを思われるが、地図に添えて朝廷に奉られた大使の報告書には「その国は京を去ること五千里、筑紫の南海中に居り、髪を短く切

つて、草の裳を着たり。稗稻<sup>ひえいね</sup>常に豊かなり。一度植えて、再び収む。産物はクチナシ・ガマ(染料や薬用にする植物)、海産物が豊富である。」などと、平和そのものである。益救島は山岳地帯が大部分なので、当時水田は少なかつたと思われる所以、ここに描かれた民俗は多くは多櫛島のものであろう。

文武二(六九八)年、大宝律令の施行をまじかに控えて、南九州に国を設置する下準備の一環として文忌寸博勢を團長とする武装覓国使が多櫛島に送られた(覓国は、国をもとめる意味)。文忌寸は朝廷の祭祀に参与する古い伝統を持つ氏族である。この時代はまだ祭政一致の遺風を留めていたため、宗教面から南島の司祭団の説得に当るのが彼に課せられた任務だったに違いない。任務は成功したようだ、文武三(六九九)年、朝廷は南島からの献物を伊勢の大神宮などに奉っているが、この場合の献物は、鹿皮や麻布ではなく、南島の司祭権を象徴する品物だった可能性がある。こうして、大宝二(七〇二)年、多櫛国が誕生した。薩摩国とは同時で、多櫛国には益救島、口永良部島が含まれる。

そして、太宰府が律令の定め通りに私有の田畠をすべて収公し、成人男女に分配する口分田制度を実行したため、そのようなことになると夢にも思わなかつた隼人たちが反乱を起こした。しかし、太宰府の軍勢に鎮圧され、戸籍簿が作られ、同時に、遣唐使船の航路が全面的に南路に改められた。

和銅六(七一二)年、さらに日向国から四郡を割いて大隅国が置かれた。この時も大隅隼人が反抗した。一応は鎮圧されたが、大隅北部の曾国が強固な民族であつたためか、養老四(七一〇)年には反乱が再燃、大隅の国守が殺害され、大伴旅人が十万の大群を率いて鎮圧に乗り出す隼人の大暴動にまで発展した。天平五(七三三)年には、多櫛国熊毛郡大領安志<sup>あした</sup>託ら十一人に多櫛後国造の姓、益救郡大領加理<sup>かり</sup>僚<sup>り</sup>百三十六人に多櫛の直の姓、能満郡少領栗麻呂<sup>くりまろ</sup>ら九百六十九人に直の姓を賜つた。千二百人にもものぼる大量の賜姓は、多櫛国に国府城が完成したことを祝つてその建築に協力した土豪に与えられたものではないかと言われている。

天平勝宝五(七五三)年、唐の高僧、鑑真和尚が益救島に漂着した。また、それと前後して、遣唐副使吉備眞備の船も益救島に漂着したことが、太宰府からの奏文として「続日本紀」に見える。

鑑真和尚は揚州竜興寺の住持で、日本の僧尼に戒律のないことを知り、それを正そうと來日を志し、渡海に失敗すること五回、その間の失明にも屈せず、六回目についに遣唐使船に便乗して来日することに成功した。

しかし、この頃、朝廷の南島経営の熱意は

冷却しかけていた。天平年間に入つてから朝廷は遣唐使に消極的になり、加えて太宰少弐

藤原広嗣の執政者への謀反により、太宰府そのものが廃止され（三年後には再興）、多櫛国

司に任せられるのは左遷された官僚が多くなった。天長元（八一四）年にはついに多櫛国は停止され、大隅国に合併された。そして、この後の約二百年間、南島の歴史は空白となつた。

延長五（九一七）年に完成した「延喜式神明帳」には、大隅國馭謨郡の益救神社が載つてある。現在、宮之浦にある、南島守護・山岳信仰に起源を有する古社である。

平安時代末期、太宰府の統制が緩んだのをいいことに、各地に荘園が立てられた。多櫛島、屋久島（中世以後は「屋久島」の字を用いる）なども近衛家の荘園（島津荘）に組み入れられた。

鎌倉時代に入ると、屋久島は種子島、口永良部島と共に島津の勢力下に入り、応永十五（一四〇八）年には種子島家の領地に安堵される。十五世紀は正に戦国時代を迎える解放された時代で、幕府も島津も日明貿易に積極的に乗り出し、屋久島・種子島は、堺を発航地に四国沖を通つて東シナ海から寧波に達する航路上の重要な中継地となつた。特に大きな役割を担つたものに屋久杉による造船があつた。管領細川高国が種子島氏に命じた勘合貿

易船の建造はそれを示している。

さらに、勘合貿易線上に法華宗徒の熱心な交流も生まれた。堺町人衆との接触である。

種子島家第十一代・時氏のとき、日典上人の殉教を辞さぬ捨身の教化が、三島（種子島・屋久島・口永良部）をあげて法華宗に導いた

のもそのような時代背景がある。日典の法弟日良上人（淡路島出身）が寛正年間（一四六〇）一四六五）、根氣よく島民のあいだに教えを広めたが、最初は律宗寺院慈遠寺（大同二年創建）をはじめ、保守勢力が改宗に同意しなかつた。そこで、島主時氏の招きで京都の

本能寺第七世管長日増上人が来島、律宗僧侶と法論、論破して彼等を改宗せしめた。

その頃、屋久島では地震が頻発し、八重岳が鳴動して止まなかつた。日増上人は、長享二（一四八八）年に屋久島へ渡り、長田の長寿院と御岳の山頂の岩窟にこもつて鎮護祈願を重ね、鳴動を鎮めた。現在も岳の山頂に建つ「一品法寿大権現」の碑石がそれを物語つている。岩窟は古来、修驗者や山伏の道場でもあつた。石碑は山岳信仰の靈地を示し、これが今も島に残る「岳参り」のはじまりである。

大永四（一五二四）年、種子島氏は屋久島の長田・吉田・楠川に築城した。倭寇の警戒、船舶の見張りのためである。天文十二（一五四三）年には種子島に鉄砲が伝來した。時代は急速に鉄砲ブームを迎えた。時代

なつた。屋久島の良質な砂鉄、豊富な木炭は大きな役割を担つたであろう。楠川城眼下、城之川を挟んだスロープ状の竹林の中にあつたタタラ遺跡がそれを教えてくれる。

因みに、日本で鉄砲が最初に使用されたのは屋久島で、天文十三（一五四四）年に種子島家が大隅の桶瀬家と戦つた長田城であつたと島の郷土史家は伝えている。が、鉄砲は伝来から漸く二年目、本家の種子島でもまだ試作品の段階であつたろう。従つて、実践に使つた銃は伝来銃であつたことが想像出来る。

戦国末期、島津家の強大化と共に、九州南部におけるその影響力は南島にも及び、特に天文年間（一五三三～一五五四）に入つて島津家に義久・義弘が出た後は、種子島家に内紛による乱れもあつて、徐々に臣従化を余儀なくされ、姻戚関係を結ぶことで重臣の列に加わつてゆく。

秀吉が天下を統一した後は、各地で土木工事が盛んに行われた。天正十四（一五八六）年、奈良の大仏殿に倣つて京都に方広寺を建てることとなり、秀吉は島津藩に用材調達を命じた。狙いは屋久杉と桧だつた。島津藩からは家老伊集院忠棟、島津忠長の二名が屋久島に派遣された。その時の伐採数は二百本と言わっていた。伝承による「ウイルソン株」がそれでいていた。ウイルソン株というのは、大正三年二

月に日本の針葉樹調査のため来島した米国の植物学者、アーネスト・ヘンリー・ウイルソン博士の宣伝によつて広く世界に紹介された杉の最大切り株である。四百四年間、腐朽することなく原形を留め、現在でも洞内には木魂・久々能智神たまが祀られている。

屋久島の豊かな森林に魅せられたのは、一人ウイルソン博士に留まらない。島津の家老たちも同様であったことは、文禄四おきで（一五九五）年、藩主島津義久が「屋久島掻条々」を規定して屋久杉の領外流失を禁止していることでも明らかである。

同じく文禄四（一五九五）年には太閤検地が行われ、領地の繰替で屋久島はいつたん種子島家の手を離れ、島津以久の領有になつた。慶長四（一五九九）年に種子島家は旧領に復帰したものの、屋久島・口永良部島は「しばらく借地としてあずかりおく」として島津家の手中に握られたまま、ついに返付されず、明治維新まで島津家の蔵入地として管理されることになつた。

屋久杉の稀に見る宝庫、莫大な経済価値に執着した本藩の策謀があつたことは言うまでもない。かくて、島民に対する平木貢納、過酷な山稼やまかせぎがはじまるのである。

一方、口永良部島は天然の良港が大船の泊地となつたことから、島津家の密貿易の基地として用いるに好都合であつたため返されな

かつたと言われている。

島津家の蔵入地となつた屋久島は、慶長十七（一六二二）年から「屋久島奉行」が島を治めた。最初は奉行自身は渡島せず抑役おさえやくを駐在せしめたが、宝永五（一七〇八）年にイタリアの宣教師パチスター・ヨワン・シドッヂ神父の密入国事件が起きてから抑役を廃し、一年交替で屋久島奉行を一人宛て在島せしめた。

シドッヂは、屋久島南端の小湯泊こゆどまり（恋泊まごどまり）唐崎からさきに日本の武士姿（和服をつけ刀を差し鬚まゆを結う）で上陸したが、たちまち変装を見破られて奉行所の役人に捕らえられた。宮之浦の借牢に五十日間も監禁された後、島津の役人に護送されて長崎奉行所に送られ、さらに一年後には江戸の切支丹屋敷に移された。

屋久島は大半が山岳で米作は不可能に近く、

そこで幕府の信任厚い新井白石しんゐしろがシドッヂを取り調べた問答集、『西洋紀聞』『采覽異言』が生まれたことは有名な話で、このことが幕府の鎖国制見直しとなつて、西洋文物導入の糸口になつたことはよく知られている。

平木がいつ頃から屋久島の貢納に当たられたのかは今確かな資料を得ないが、一説によると、寛永十九（一六四二）年に、藩主島津光久の侍読ともじよぢよだった屋久島出身の泊如竹翁とおりじよぢよが屋久杉の利用を藩庁に勧めたからだとも言われている。

島津奉行所では、貢納の平木の生産に重きをおき、目標額を如何に「勝手方」に送るかが第一であった。

平木とは、樹脂分に富んだ腐朽し難い屋久杉を割つて作る板瓦のことで、美麗な木目が建築材としても賞用され、広く雄藩の神社仏閣にも需要が高かつた。さらに、遠く中国・朝鮮にまでも移出された。中でも琉球に対する木材の輸出には、王国復興を願う島津の意向により栗生や永田に大船が配置されて琉球への輸出に当つたという。

それまで島民は山神の棲む山を崇め、精靈

の宿る神木を恐れて一切屋久杉を伐ることをしなかつた。薩摩藩の外交官でもあつた如竹翁は難問解決に神の許しを以てする奇策を案出した。即ち、伐採の前日にその木に斧を立て掛けおき、斧が倒れていなければ神が許されたもの、斧が倒れていならその木は神木であつて伐採は許されない。この島民の蒙を開くに巧みな如竹の指導によつて、人々は山で働くことを恐れなくなつた。

寛永十六（一六三九）年の検地による屋久島の石高は千三百七十四石、真米一石は平木百四十束に代貢され、一束は平木百枚である。しかし、林業専一に過ぎた結果、さしもの屋久杉も長年月で次第に荒廃に向かい、享保年間（一七一六—一七三五）に入ると島民を山稼から余業（農漁業）に振り分けて、山入りを制限するように取り計らわせた。

島民は、もともと険阻な山中での報われることの少ない山稼ぎに気乗りがしていなかつた。享保の勧告<sup>（どんちやく）</sup>をいいことに山稼ぎに頓着せず、飛魚捕り、鰐節作り、焼烟開墾にかまけて平木を作らなくなつた。他人の製品を買入れて貢納するものまで現われる始末で、天保年間になると減少が過ぎて定量を賄えない事態となり、奉行所は今度は逆に「山稼奨励達書」を発令している。山稼ぎは長年の経験を要するもので、急場の役には立たない。役所は、木質の目利き、作業の効率化を図るた

め、十二、三歳から二十五歳の村人に、毎年七日以上の技術習得を命じ、村ごとに該当人名簿を届けさせている。

年代は前後するが、文化九（一八二二）年に幕府の天文方伊能忠敬<sup>（いのうただか）</sup>一行が屋久島に来島して測量を行つてある。隊員は十九人、薩摩藩手伝七十二人の総勢九十一人が、薩摩の大船八隻に分乗して三月十一日鹿児島を出航した。途中、風待ち二十日間（往路に十八日間）、種子島渡海までに十二日間）、実測期間十八日間（雨天不測日四日を含む）で、合計四十八日間が費やされている。島の唯一の古文書『楠川文書』に「測量方夫立差出帳」というのがあるが、それによると楠川の小集落からかり出された人夫は、何と延千七百三十七人。当時の楠川の人口が隠居や子供を除くと百七十人前後であるから、如何に多くの使役であるか分かろう。これが島内十七ヶ村に及ぶ時、恐ろしいほどの人夫を提供したことになる。

伊能忠敬の屋久島地図は、沿岸部については今日の測量技術と遜色なく精細であるが、内部の山岳地帯は空白になつてゐる。そびえ立つ八重岳は、短期間の測量をもつてしては忠敬の手にも余つたのであろう（永田岳は麓からの遠測で描かれている）。仮に、九州一の宮之浦岳頂上に立つて星を観測し、急斜面で巨杉と対面したとすれば、島の歴史に一つの話題を刻んだことであろう。

享保十三（一七二八）年の「屋久島規模帳」には、他国への禁制品明細、津口銀定（勝手方の許可制物産）として、例えば、黄楊、柏、桧、杉、棕櫚、蘇鉄、楓、薬草のガジュツ、ウコン、オーレンなどが記載されている。と

ところで、屋久島奉行所では貢納平木の他に、別途の売り上げ制度の道もあつた。（鹿児島城下の大廻などの）万一に備えた対価による蔵入れ制で、この分でも島民は日常生活を維持できたとも言われている。まず、奉行所は各集落ごとに年間の生活物品を調べる。平木を鹿児島に積み上つた御用船は、勝手方の証明をもらい必要量の生活物品を島に積み下る。品物代銀は平木の納入で賄われる仕組みになつていたが、鰐節の売り上げによることもあつた。屋久島周辺で捕れる鰐節は極上品で、年々の将軍家への献上品に用いられ、大阪市場では土佐節を凌ぐとさえ言われていた。

そのため、他領からの出漁船も船手の免許証文をもつて許され、漁獲物の積み出しには宮之浦の津口番所で津口税が課せられ、国内五ヶ所の番所がその任に当つた。津口銀も積み出しに際して検査と課税がなされた。特に屋久杉の販売と積み出しは藩の財政上重要な位置を占めていただけに、すこぶる厳重な取り締まり規制が設けられていた。

もあれ、藩の需要を第一義にする趣旨であつた。したがつて、他国積み出しを宮之浦港一港に制限した訳だが、かかる厳重な取り締ま

りにもかかわらず密輸行為が絶えることはなかつた。

慶應四(一八六八)年には政治の大変革がおこつた。明治維新である。屋久島奉行所は廃止されたが、藩の知政所が新しく生産奉行の職制を定めて、明治四年までは平木上納の義務に変化はなかつた。廃藩置県によつて藩体制は解体され、屋久島にも戸長制が敷かれ、ようやく島の山河が島民の手に帰つたかに見えたが、そうではなかつた。

明治六年に地租改正が行われたことで屋久島には大問題が待ち受けていた。鹿児島県は明治十年の西南戦役の前後、改正事業が出来る状況ではなかつた。屋久島の整理作業に入つたのは漸く明治十二年で、明治十四年に完了している。

官民境界区分に当つて、改正官吏からは、爾後の改正は五年毎に見直される、その都度訂正も出来る、税負担も今は国有にしておく方が得策である、との旨の説明があつたといふ。よつて、藩制下では山林は藩のもの、それはまた地元民のものとする主張を、地租改正に当つて強く主張しなかつた。これがために島の面積の八十%を国有に編入されて、後日、薪炭にもこと欠き、山稼ぎが出来なくな

つて大いに不満が爆発した。

明治二十六年、國への願書「山林誤謬訂正願」が却下され、同二十二年発布の「国有土地森林原野下戻法」を機に、同二十三年、上・下両村議会決議の上で「下戻申請書」を提出した

が同三十六年に不許可、最後の手段で国を相手に行政裁判を提訴したが、十六年を経過した大正九年に原告・島民側の敗訴で終わつた。

この長期に渡つた裁判中に、島民の経済不安につけ込む大阪商人のグループが現れた。島民には縁故払下げという特典があるという口実で調印を勧誘する「屋久杉の永久払下げ運動」である。この問題は島を二分する社会問題にエスカレートし、憂慮した当局は前岳七千町歩を委託林として島民に解放した。これが即ち、「国有林經營大綱」、俗に言う「屋久島憲法」である。

最後に、昨今、屋久島は世界自然遺産登録、生物圏保存地域、原生林自然環境保全地域、国立公園、その他多くの指定地となり、世の注目を集めているが、来島者が大杉見学に終始するところなど見てみると、どうも今一つ、ゆたかな自然の森に対する視点が合つていな。学術的自然保護規制が未整備であることにもよううが、古来、島民が靈山神木として崇めた森林、山岳信仰の聖地として屋久島を捉えることがこの島の歴史を正しく伝えることになりはしないだろうか。



キンセンカ

Calendula officinalis  
静脈瘤、皮膚病に効果

★新学期は毎年6月からスタート  
お問い合わせ・お申し込み TEL 0997-4205  
鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦2452  
電話 0997(42)0703



働きながら学べる日本初の  
本格的な自然療法学校誕生!

生命力の島、屋久島で生まれたヨガ  
パティー自己確立研修センターの自然  
療法コンサルタントコースでは、スイ  
ス自然療法医師団協会の水準で学ぶ西  
洋医学の知識から、薬草療法、ボディー<sup>セラピー</sup>、ホメオパンシー、アロマテラピー、  
バツチフラワー、オーラソーマ、ヨガパティー  
独自のカラーアイデンティティ診断+療法 他:  
これらの分野を、精神的に動搖しない  
安定した自分を築いていく為の心理学  
と合わせて学んでいきます。

- 学歴を問わず18才以上の人、何か  
を学ぶにはもう手遅れと思つてゐる方  
(本業の傍らで学びたい方、主婦他)  
などの方々に最も適しています。